

平成 18 年 9 月

2006 年夏 明と暗

所長 稲垣 一則

「高校野球」がこれほど盛り上がった年があっただろうか。飛び交うホ - ムラン、信じられない逆転劇、勝ち進む強豪・有名校、石垣島から出場の八重山商工、山形県勢の活躍等々に「面白いなあ、今年の甲子園は」と人々の声。そして、極めつけは、人気高同士の早実 VS 駒大苫小牧高決勝戦の延長引き分け、更には再試合への盛り上がり。この筋書きのないドラマはヒ - ローをこの夏誕生させた。一夜明ければ「有名人」、その言葉どおりに一躍アイドルとなった早実の齋藤佑樹。知的な容貌、沈着冷静な表情、品よく青いたオルハンカチで汗を拭く仕草に、世の女性は胸をときめかせている。

一方、ヒ - ロ - (?) から一転して大バッシングに晒されたのが亀田興毅。父と三人の子供、亀田一家の特異なキャラクター - と「亀田節」といわれる言動、ユニ - クなトレーニングを素材として、TBSと協栄ジムが筋書きを作り、主役を演じるは亀田一家。そのドラマは8月2日の王座決定戦の「勝利」により第1部は完結する予定であった。「勝った」、しかし疑惑の判定であった。一挙に風向きはアゲンスト、喧々囂々たる亀田批判に今度は右へ倣え。「亀田ドラマ」において、唯一筋書きどおりにいかなかった部分が、試合そのものであった。

よく、スポーツは筋書きのないドラマ、といわれるが、見事なまでの「明」と「暗」である。さてさて、プロへ行くか早稲田大学進学か齋藤、18歳。因縁の再戦が決まった亀田、19歳。セカンドステージ、今度は明暗どっちか。